きみといっしょに(5160)

2024-10-05 01:21:29

現代パロ。二十代前半で双子、二人で暮らしている設定となります。60くんに独自の名前が付いています。
60くんがお菓子作りにハマったお話。

Posted by @dbh_litorena (/u/dbh_litorena)

「おい」
　きっちりと三回ノックした後に部屋へと入ってきたアルトゥルの声と共にふわりと甘い香りが部屋に広がり、その匂いにつられて腹がくうと音を立てた。慌てて腹を押さえたコナーが誤魔化すように笑みを浮かべると、アルトゥルの手元へと視線を向けた。彼が持つトレーには細く湯気を立てる白いマグカップと焼き菓子がてんこ盛りに乗せられた大皿が並んでいた。
「ん、ありがとう。今日のおやつは何？」
「マドレーヌだ。こっちはプレーン、こっちはチョコレートだ」
「美味しそうだね」
「美味しいに決まっている、僕が作ったんだからな」
　ふん、と鼻を鳴らしたアルトゥルはコナーへ近づくと机の上を見て顔を顰めた。パソコンで作業しているコナーの机には本、メモ、筆記用具などが散乱していてひどい有様となっている。
「もう少し片付けたらどうだ。そんなに散らかっていると作業がしづらいだろう」
「そんなことないさ。すぐにこうして確認できるんだから便利だよ」
　ほら、とすぐそばに置かれているメモを手に取って笑うコナーに溜息をついたアルトゥルはトレーを少し持ち上げてみせた。
「ならこれはどこに置けばいいんだ。見た限り、トレーを置くスペースがないじゃないか」
「ああ、ごめんね。すぐに退かすよ」
　そう言ってコナーは乱雑に置かれた紙などまとめて手に取ったかと思うと、机の端に積んでいく。そうしてアルトゥルの方へと顔を向けると、空いたスペースを手のひらで軽く叩いた。その様子に何か言いたげに口を開いたアルトゥルだったが、再び大きな溜息を零すと空いたスペースにトレーを置いた。
「……紅茶も冷めないうちに飲むといい。菓子が足りないなら言え、まだたくさんあるからな」

「うん、ありがとう。……すごく甘い匂いがするけど、それ以外にも作っているの？」

「ああ、今はクッキーを焼いている。前にアイスボックスクッキーを作ったからな、今回はステンドグラスクッキーにした」

「……ステンドグラス？」

　どのようなクッキーなのか想像出来なかったらしいコナーが首を傾げる。まあ、見てからの楽しみだ、と意地悪く口端を上げたアルトゥルは踵を返すと部屋を出て行ってしまった。

　菓子作りにハマったらしいアルトゥルは暇を見つけると大量に菓子を作るようになった。失敗するたびに歯噛みしてレシピを読み漁ってはああでもない、こうでもない、と専用のノートに改善点を書き連ねていくアルトゥルの様子は鬼気迫るものがあった。初めの方は拙かった菓子の出来が回数を重ねていくごとに上達していき、今ではプロに負けずとも劣らないほどの出来栄えとなっている。

　そんな彼が初めて作ってくれた菓子はクッキーだった。初心者向けのレシピを試してみたのだが何故か生地が膨らんでしまい、なおかつ焼きが甘かったのか色合いも淡かった。この出来は許容出来ないと落ち込むアルトゥルを横目に手に取ったクッキーの食感はボソボソとする上に固くて手放しに美味しいとは言い難いものだった。それでもアルトゥルが作ったクッキーだと思うと悪くないと感じるのだから、好きという感情は凄まじい。

　失敗したクッキーを食べた彼を呆然とした表情で見つめていたアルトゥルだったが、悪くないよ、と笑うコナーにふるふると小刻みに震えたかと思えば、細い指を突きつけて声高に宣言してみせた。

「次は絶対に美味しいと言わせてみせるからな！」

　睨みつけてくるアルトゥルに楽しみにしてるね、とウィンクをするとすごく嫌そうな顔をされたのは記憶に新しい。

　そんな紆余曲折もあった彼だったが、最近はマカロンやシュークリームなどにも挑戦したいと意気込んでいたことを思い出して、コナーは小さく笑みを零した。

　大皿に盛られたマドレーヌをひとつ手に取る。貝の形をしたマドレーヌはどれも美しい出来栄えで、焦げ目ひとつもない。ひとくち齧ってみればしっとりとした生地とバターの風味が口の中に広がり、優しい甘みに頬が緩む。

　美味しい。もうひとつ、次はチョコレートのマドレーヌをぱくりと口へと入れる。先程のプレーンより甘く、ふわりとした生地もあいまってコナー好みの味だ。いくらでも食べられそう、と淹れてくれた紅茶で喉を潤しながら、本当に上達したものだ、と感慨深くマドレーヌを見下ろす。量は多いものの、息抜きにと提供してくれる菓子をコナーはとても楽しみにしていた。今焼いているというステンドグラスクッキーも、きっと美味しいに違いない。完成したクッキーを前に、どのようなものか熱心に話す彼の姿が目に浮かんで、ああ、早く作業を終わらせてしまおうとカップをトレーへ戻す。

　こうして一人で食べる菓子も美味しいけれど、一緒に食べる菓子はもっと美味しいと知っているから。

　山のように積まれたマドレーヌをひとつ口へ放り込むと、もうひと踏ん張りと大きく伸びをしてパソコンのスクリーンセーバーを解除した。

＊＊＊

　菓子を作ってみよう。そう思い立ったのは単なる気まぐれであった。お互い甘い菓子が好きで、カフェを巡ったり、各々食べたい菓子を買い込んでは分け合うことが常ではあった。そんなある日、コナーが気になると言って買ってきたクッキーを食べながら、各々読書や動画を見て過ごしていたのだが、ふとリモコンを握っていたコナーがへえ、と声を上げげた。
「見てよ、アーティ。簡単に作れるお菓子だって、美味しそうだね」
　読んでいた本から顔を上げれば、材料を絞って工程を分かりやすくまとめられた動画が流れており、確かに見る限りでは簡単に作れそうだった。
「まあ、そうだな」
「僕でも作れるかな？」
「……普段お湯を沸かしたりレンジで温めることしか出来ないヤツがか？」
「……も、もう少し出来てるよ！」
　そう言って膨れっ面となったコナーだったが、何か言いたげに眉を顰めるアルトゥルに居心地が悪そうに目を逸らした。
「ま、まあ、少し自信はないけど……、アーティは作れそうだよね」
「僕？」
　目をまんまるとさせるアルトゥルに小さく頷いてみせたコナーはふにゃりと笑みを浮かべた。
「僕よりはそういうの得意でしょ？　君の作るお菓子はきっと美味しいに決まってる」
　ね、と嬉しそうに笑うものだから。今まで作ったことはないけれど、作ってみてもいいかもしれないと。気のない返事をしながらも、そう思ったのだった。
　そうしてレシピを探して作ってみたクッキーは散々なものだった。スコーンよりも薄く膨らんだ生地、半焼けのように色合いなくせして固くボソボソとした食感。お世辞にも美味しいとは言えない出来に、アルトゥルは呆然と焼き上がったクッキーを見下ろした。きっとコナーは失望するだろう、あれだけ嬉しそうにしていたのだから。隣に立つコナーのことを見ることが出来ず、身動きも取れなくなったアルトゥルをよそに、コナーはひょいとクッキーを口に入れた。
　形の良い唇が咀嚼のたびに動き、そうしてこくりと喉が動いたのを見届けて。そうして笑ってみせたコナーにアルトゥルは悔しさと怒りと、そして安堵に胸がいっぱいになって、このままで終わらせるものかと激情に駆られて声を張り上げたのだった。
　この男に絶対に美味しいと言わせてみせる。そう決意して試行錯誤を重ねた結果、まだ改善の余地はあるがそれなりに美味しいものが作れるようになった。コナーが満面の笑みで美味しいと叫んだ時は思わずガッツポーズをしてしまったくらいには頑張った。そのうち、その笑顔が長く続くようにと作る量を増やし、レパートリーを増やし、暇を見つけては作るようになった。一度二人では消費しきれないほど量を作ってしまった時は流石にコナーから苦言を呈されたが、今では適切な量を作るようにしている、つもりだ。

オーブンの中で甘い香りと共に焼けていくクッキーの様子を見守っていたアルトゥルの耳にテーブルに何かを置く音が聞こえた。振り向けば先ほど差し入れに出したマドレーヌが乗った大皿を手にコナーが立っていて、大皿の上のマドレーヌは三分の一ほどなくなっていた。
「とても美味しかったよ。いくらでも食べられそう」
「ふん、なら良いが。……まだ残っているが、多かったか？」
　そう問えばふるりと首を横へと振った彼が、今日一番の気の抜けた笑顔をこちらへと向けた。
「ね、アーティ、一緒に食べよう」
　彼からのお誘いに小さく笑みを浮かべると、まずはお湯を沸かさねばとポットを手に取った。

@dbh_litorena (/u/dbh_litorena)

りとれな⭕(くるんちゅ)

(http://x.com/dbh_litorena)